

2021年1月10日(日)「死を直視する知恵」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 7:1-6

- 1 名声は良質の香油にまさる。死ぬ日は生まれる日にまさる。
- 2 弔いの家に行くのは酒宴の家に行くにまさる。そこには、すべての人間の終わりがある。生きる者はそれを心に留めよ。
- 3 悩みは笑いにまさる。顔が曇っても、心は晴れるのだから。
- 4 知恵ある者の心は弔いの家に、愚かな者の心は喜びの家にある。
- 5 知恵ある者の叱責を聞くのは、愚かな者の歌を聞くにまさる。
- 6 愚かな者の笑いは、鍋の下で茨がはじける音のようなもの。これも空である。

《新改訳 2017》伝道者の書 7:1-6

- 1 名声は良い香油にまさり、死ぬ日は生まれる日にまさる。
- 2 祝宴の家に行くよりは、喪中の家に行くほうがよい。そこには、すべての人の終わりがあり、生きている者がそれを心に留めるようになるからだ。
- 3 悲しみは笑いにまさる。顔が曇ると心は良くなる。
- 4 知恵のある者の心は喪中の家であり、愚かな者の心は楽しみ家にある。
- 5 知恵のある者の叱責を聞くのは、愚かな者の歌を聞くのにまさる。
- 6 愚かな者の笑いは、鍋の下の茨がはじける音のよう。これもまた空しい。

【序論】

12章までである「コヘレトの言葉」の後半に入っただけです。2021年も本書を中心に御言葉を学んでいきますが、早速出てくるのは「箴言」のような内容です。そこには読者が心を留めるべき真理が綺羅星のように散りばめられています。一般的に人間が「良い」と考える事柄を、コヘレトは敢えて「悪い」と言い、読者に「え？」と思わせる。その上で、なぜ自分がそう考えるのか(進言するのか)の理由付けをしていきます。

私事ですが、私は「格言集」という Excel ファイルを自作してしまっていて、読んだり聞いたりした「これぞ」という格言をたくさん書き留めています。その際、それが誰の言葉であるか、また出典があれば出典をメモ書きするようにしています。この秘密のファイルに登場する人々は、例えば、亡くなった恩師、父親、親戚、小説や漫画の登場人物、ドラマの主人公、文豪、歌舞伎役者、野球選手、音楽家、格闘家、教会員など、多岐に亘ります。これは私の気持ちをいつでも前向きにしてくれる大切な資料です。

それに対し、コヘレトが並べている格言の多くはどこか死臭が漂っていて、読者の心をギュッと引き締めさせます。彼の人生観の背後には常に「死ぬ日」があるのです。

## 【本論】

今日扱う 7:1-6 の中でキーワードの移行があります。

①死の相対的優位性（1～4節）

②知恵ある者と愚かな者（4～6節）

とはいえ、全体としては「死」という思想がその底流を流れています。

### 本論 1. 死の相対的優位性

**名声は良質の香油にまさる。死ぬ日は生まれる日にまさる。(7:1)**

この格言集には繰り返し「～にまさる」（原文では「טוב／トープ／良い」という表現が出てきます。何かと何かを比較対照し、どちらの方がまさっているかを判断する。ここでは「名声」と「良質の香油」が並べられています。この一見関係のないような二つの事物をどう結びつけるかを検討しなくてはなりません。

「名声」（נפש טוב／トープ・シェーム）は直訳すると「良い名前」ですが、基本的には評判が良いことを言い表しているでしょう。名前は、その人の性質を表すものと考えられていましたから、彼／彼女の性質から流れ出る評判ということが言われているようです。それに対し、「良質の香油」（טובתן מושמן／ミッシェメン・トープ）は、人を外面的に飾る香りであり、古代人にとっては高価な贅沢品でした。ちなみに、「シェーム」と「ミッシェメン」は語呂合わせになっています。ここでは、外面的芳香と内面的芳香とが対比されている。また、もう少し突っ込んで考えてみますと、「香油」というのは死者のからだに塗られるものでもありますから、死者の腐敗を覆うものとしての表現と言うこともできます。それに対して「名声」とは、死後にも語り継がれるその人の人生を表しており、良い評判が残るところに価値あるものとなります。場合によっては、それはひっくり返ってしまうかもしれません。保証された名声は、一時的に死体の腐臭を覆う香油にまさるといわれているのでしょうか。このように読んでいきますと、1節の前半部分だけを取っても「死」と関連することが語られていることが分かってきます。

「死ぬ日は生まれる日にまさる」。ここには驚くべき逆説的真理がある。人間は生きることに執着し、死んでしまったら一巻の終わりだと考える人が多いでしょう。しかし、コヘレトは生きること以上に死ぬことが重要だと言うのです。確かに人の誕生は喜ばしいものであり、生まれてくることの意味を考えさせる出来事です。にも拘らず、人の死は誕生以上に圧倒的なインパクトをもって私たちに「人生」を考えさせます。自分もや

がてその日を迎えることになるのだ。死んだ後、どこへ行くのか。今どう生きなくてはならないのか。この世に何を残すべきなのか。何を解決しておかなくてはならないのか。実に多くのことを死は教えてくれます。死を厳粛に受け留めるところには、人間の真面目な生き方が伴うでしょう。

## 本論 2. 死の相対的優位性

**弔い家に行くのは酒宴家に行くにまさる。そこには、すべての人間の終わりがある。**

**生きる者はそれを心に留めよ。(7:2)**

ここでも似たようなことが言われていますが、「弔い家」すなわちお葬式にまで話が進んでいます。酒宴と葬儀という正反対の事柄が対置されている。酒宴というのは基本的に楽しい場でしょう。お酒を呑んでいる人々にとっては楽しい。私のイメージですが、アルコールは麻酔薬のようなもので、一時的に嫌なことを忘れさせ、人の気を大きくし、普段言えないことまで口にさせる、言わば「たがを外させる」ものだと思います。それが人に良い作用を及ぼす面もありながら、罪に発展することも多いでしょう。節度を失った言葉を口に出したり、現実に関心を向けないようにさせたり、あるいは不品行に誘うこともあります。

それに対し、葬儀においては、人は人生の最終段階に心を向けます。自分の永遠を考えさせ、現在の生き方を問うものとなる。その意味で、葬儀に参列することは、酒宴に列席する以上に重要と言えます。

**悩みは笑いにまさる。顔が曇っても、心は晴れるのだから。(7:3)**

ここで「悩み」と訳されている言葉 (אָפּ) / カアス) は、「怒り」「苛立ち」「怒らせる行動」「悲しみ」「フラストレーション」といった意味を持ちます。ここでは「死」との関わりを持たせるために「悩み」(悲しみ)が選択されたと思われます。ちなみに、同じ言葉が 5:16 では「いらだち」と訳されています。

**人は生涯、食べることさえ闇の中。いらだちと病と怒りは尽きない。**

5:16 では「カアス」は人生における悪しきものとされ、7:3 では良いものとされています。この矛盾をどうクリアすべきかという議論がありますが、コヘレトは平気で正反対の真理を自分の書の中で書く人であるということを読者は忘れてはなりません。文脈次第でどちらも正しくなるのです。つまり、7:3 で「カアス」が正当化されるのは、それが現実に関心を付けているからでしょう。「悩み」と訳されてもよいと思います。「怒り」であれ「悩み」であれ、人は現実をしっかりと見据えなくてはならないということをコヘレトはメッセージとして語っているのです。

私は青年期に多くの悩みを持っていました。どうして人生にはこんなに問題が多いのかとやりきれない思いになっていた時期があります。そのとき、ある友人が言ってくれた言葉によって、自分の中でストーンと落ちたのを感じました。「問題があるということは、生きていることの証なんだ。死んでいたら問題は生じない」。個人であれ組織であれ、生きて動いているところには問題が付きまといまいます。それを乗り越えてベストの答えを見出していく。問題があるということ自体が悪いのではない。人が生きていて、物事が動いているからこそ、考え、乗り越えていかななくてはならないことが出てくる。人は生涯そのようにして人生を歩み、責任を果たし、最終的には死によって地上の問題から解放されるのです。

### 本論 3. 死ぬ日に心を留めて生きるとは

**知恵ある者の心は弔いの家に、愚かな者の心は喜びの家にある。(7:4)**

ここでは2節の思想が反復されています。それと同時に、キーワードの移行が起きています。ここからは「**知恵ある者**」と「**愚かな者**」という言葉が繰り返されます。

ここでは、死を直視し熟考することが「知恵」だと言われている。自分の人生には終わりがあり、その来るべき日に向けてどう生きるかを考えることが知恵だとコヘレトは言っているのでしょう。「どう生きるか」の中には、「死ぬ日に如何に備えるか」も含まれています。私の母は現在70代ですが、母宅に行きますと『死に方改革』という本が置いてあって、そのタイトルに驚きました。最近母と同年代の友人が病で倒れたことから、より真剣に自分の死を考えるようになったようです。現在母は持ち物のミニマム化を徹底して行っており、遺された人に迷惑をかけないようにと努めています。心では思っても、実行するのはなかなか大変なことです。

**知恵ある者の叱責を聞くのは、愚かな者の歌を聞くにまさる。(7:5)**

コヘレトが言う「**愚か**」とは、自分の死を真剣に考えないことを意味するのは、言わずもがなでしょう。しかし、一般的に死ぬ日のことを語るのはタブー視されやすく、そんなことは語るべきではない、縁起でもないと言われるのが世の常です。コヘレトはそのような姿勢に真っ向から対立し、「いや、誰もが自分の死を考えなくてはならない、その日は確実にやってくるのだから」と語気を強めます。「**愚かな者の歌**」とは、地上の束の間の楽しみを美化する現実逃避的な歌のことを言っているのでしょう。

**愚かな者の笑いは、鍋の下で茨がはじける音のようなもの。これも空である。(7:6)**

コヘレトは自分の死を真剣に考えようとせず、現実逃避の人生に終始する人の「**笑い**」を冷笑し、鮮やかなたとえをもってそれを表現します。「**鍋の下で茨がはじける音**」とあ

ります。「茨」はすぐに燃え上がるけれども、音ばかりパチパチとうるさく、すぐに燃え尽きてしまう。そのように、ほとんど何の役にも立たない（すぐに消えてしまう）現実離れした「笑い」に走ることをコヘレトは戒めているのです。

## 【結論】

さて、自分の死に真剣に向き合うことをコヘレトは強く勧めています。その日を平安に迎えるためにどうしても必要なことを最後にお伝えしたいと思います。死んだ後、自分がどこに行くのかが分からないのであれば、見つめるほど恐ろしいものでしかありません。パウロはキリスト者の「死」について次のように語っています。

私たちの地上の住まいである幕屋は壊れても、神から与えられる建物があることを、私たちは知っています。人の手で造られたものではない天にある永遠の住まいです。私たちは、天から与えられる住みかを上に着たいと切に望みながら、この地上の幕屋にあって呻いています。それを着たなら、裸ではないことになります。この幕屋に住む私たちは重荷を負って呻いています。それは、この幕屋を脱ぎたいからではなく、死ぬべきものが命に呑み込まれてしまうために、天からの住みかを上に着たいからです。私たちをこのことに適う者としてくださったのは、神です。神は、その保証として霊を与えてくださったのです。それで、私たちはいつも安心しています。もっとも、この体を住みかとしている間は、主から離れた身であることも知っています。というのは、私たちは、直接見える姿によらず、信仰によって歩んでいるからです。それで、私たちは安心していますが、願わくは、この体という住みかから離れて、主のもとに住みたいと思っています。だから、体を住みかとしていようと、体を離れていようと、ひたすら主に喜ばれる者でありたい。私たちは皆、キリストの裁きの座に出てすべてが明らかにされ、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行った仕業に応じて、報いを受けなければならないからです。（Ⅱコリント 5:1-10）

「地上の住まいである幕屋」とは人間の肉体を指します。それは死とともに滅びると。しかし、キリストを信じる者には「神から与えられる建物」すなわち朽ちることのない栄光のからだが生きた後に与えられる。復活のいのちとともにそれが着せられるのです。この地上で、この肉体を使って行なったすべてのことが審かれ、評価され、そのうえで真新しいからだを与えられ、永遠に生きる者とされる。この希望を抱いてこそ、私たちは恐れずに自分の死を直視できるのではないのでしょうか。

## 【祈り】

アルファでありオメガである神よ。万物の初めはあなたに属し、万物の終わりもまた同様であります。私たちの人生もまたその一部であり、生まれてから死ぬまでのすべての日々はあなたのものです。それゆえに、この人生をお与えになったあなたを覚え、終わりの日をささげる備えをしたく願います。誰のために、何のために生きた人生であったか。そのように問われたときに、「我らの創造主・贖い主であるイエス・キリストのため」と明確に答える者とさせてください。そして、言葉だけでなく、生き方、死に方においてもその信仰を証しすることができますように。

## 【祝祷】

仰ぎ願わくは、  
すべての物事の初めであり、終わりであり給う、父なる神の愛、  
死の日を見つめて生きる者に、罪の赦しと栄光のからだの希望を与え給う、主イエス・キリストの恵み、  
地上にあっては「保証」の御霊として信じる者の内に臨在し、永遠の神との交わりの実現に至らせ給う、聖霊の親しき交わりが、  
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。

---

<sup>1</sup> 「茨」(הַסִּירִים/ハッシーリーム/סִירの複数形に定冠詞)と「鍋」(הַסִּיר/ハッシール/סִירの単数形に定冠詞)は原語では同じ言葉であり、複数か単数かの違いだけです。また、「愚かな者」(כְּסִיל/ケシール)との語呂合わせにもなっています。